

# 日本の国土自然を思う

— 平成二十三年三月十一日の後で —

山下善明\*

## 第一章

〈国土〉とは、今日の通用での第一の意味においては、統治権の及ぶ領域のことである。例えば日本国土の総面積は三十七万余平方キロメートルであるというが如くである。これにおいては、国土とは領土である。現時丁度、竹島や尖閣列島、そして長らく北方四島をめぐってその領有権が争われている。領土とは必ず固有領土なのである。

しかし国土とは本来〈仏国土〉のことであった。すべての衆生が救済される仏の国のことである。けれどこの漢語が日本に移されて日本語化するとともに、それは、地上の国土という色合いを深めた。かかる国土を、西田幾多郎は、戦渦の中、昭和二十年四月十四日、生涯最後の著作『場所的論理と宗教的世界観』を閉じる一行で、「国家とは此土に於て浄

土を映すものでなければならぬ」と書いた。こうして現代国語辞典においても、〈国土〉の第二の意味として、「天に対する地。生けとし生けるものふる里、大地」と記されている<sup>(1)</sup>。大國語辞典を開くとその古い用例として、例えば『風雅和歌集』（一三三九年）の十六・雑中から、「大空にあまねくおほふ雲の心国土うるほふ雨降すなり」という歌があげられている。また出典が示されないながら、「日月、国土を照らす」とも。

日月の光が降り、雨にうるおう国土は、草木国土である。草木国土として、それは仏国土である。即ち、草木国土悉皆成仏ス。この語は、およそ二十ほどの謡曲にも引かれていると聞く。小学館『日本古典文学全集』第三十三、第三十四巻の謡曲集に依って、筆者の調べた限りでは、『定家』、『采女』、『真如観』、『弱法師』、『鶴』などに引かれている。しかし最も美しく引かれているのは、『杜若』の終りの地謡においてである。

袖白妙の、卯の花の雪の、夜もしらしらと、明くる東雲の、浅紫の、杜若の、花も悟りの、心開けて、すはや今こそ、草木国土、すはや今こそ、草木国土、悉皆成仏の、御法を得てこそ、失せにけれ。

近代文芸の中では、例えば『青鞥』創刊の辞『元始、女性は太陽であった』の中で、仏陀の悟りの内容として引用符が付せられて、

釈迦は雪山に入って端座六年、一夜大悟して、「：曰く、一切成道して法界を覩見するに、草木国土悉皆成仏す」と。彼は：真の自然主義となった。

と誌されているのをみる。<sup>(2)</sup>しかし、漱石の『門』二十に見えるそれとなると、地の文の中ではもとよりありえず、登場人物——若僧の宜道——の叫んだ声として、しかも主人公・宗助の又聞きとして謂わば間・間接話法で述べられるのみである。

その時分の彼は彫刻家であった。見性した日に、嬉しさの余り、裏の山へ駆け上って、草木国土悉皆成仏と大きな声を出して叫んだ。そうして遂に頭を剃ってしまった。

ところで、この作の例えば新潮文庫版では、巻末に次のような註記が付けられている。『中陰経』に「一切成道、観見法界、草木国土、悉皆成仏」とある。『仏教辞典』を開けば、確かに、平安末期の宝地房証真（一一五六～二〇七）の『止観私記』に「中陰経云」としてこの四句が掲げられているという。しかし仏教学者・竹村牧男氏によれば、この四句自身は四世紀後半、竺仏念による漢訳『中陰経』には見られないとい<sup>(3)</sup>う。だから、と竹村氏は言う、「この句は日本で作られたと考えられ、その思想は日本的な思想と考えられるわけである」と<sup>(4)</sup>。ところがその一方で、竹村氏は言う、「この句は、（北宋から南宋の頃の）道邃（一一〇六～一一五七）の『摩訶止観論弘決纂義』巻一に出る「一仏成道 観見法界 草木国土 悉皆成仏」がもっとも古いものと見られている」と。そうとするなら、この句は日本で作られたとも、日本的な思想とも考えられない。しかし再び仏教辞典を見ると、この句は、最も早くは、平安前期の安然（八四一～九一五）の『斟定草木成仏私記』に、『中陰経』に云く」として述べられているという。そこで、不学な筆者の当て

推量で言えばこうである。即ち、安然は『中陰経』に事寄せて、自らの「日本的な思想」を述べた、安然は宋に渡ったかどうかは異説があるけれども、もし渡ったとすれば、それが道邃に伝わり、謂わば逆輸入されて、証真も「中陰経に云く」と語ったのではあるまいかと。

いづれにしる、この語句の最も古く録されたものは日本に見出されることは確かである。従って、草木国土が、仏となれることを自ずと有する（有仏性）であるというのは、竹村氏と共に、「日本的な思想」と言わねばならない。ただし、その句は漢語で綴られている。だからこそ、大陸へも伝わった。

日本の自然はしかし、はる、なつ、あき、ふゆである。私たちが高校生頃より馴染んでいる『徒然草』にみれば、その第一九段、「のどやかなる日影に、牆根の草萌えいづる」はる——「家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶる」なつ——「秋の下葉色づくほど、早稲田刈り干す」あき——「見る人もなき月の、寒けく澄める」ふゆである。そしてまた日本の自然は、はな、とり、かぜ、つき、である。〈花鳥風月〉である。花の色を見、鳥の声を聞く、風のそよぎを聞き、明るき月を見る。しかしました、鳥に替って雪が入って、〈雪月風花〉とも言われる。その入れ替りは、「第九章・冬の美の発見」から「第十章・冬の美」へという連なりをその重要な展開としている唐木順三『日本人の心の歴史』<sup>(6)</sup>に従えば、平安王朝文化から鎌倉、室町文化への移行を表わすものかとも思える。

川端康成はしかし、既に白居易の詩に見られる〈雪月花〉と三文字だけを好んで揮毫したといわれる。<sup>(7)</sup>ところでその康成が、一九六八年、ノール文学賞受賞記念講演『美しい日本の私』<sup>(8)</sup>の冒頭で引用して一段と広く知られるようになった道元（一一〇〇—一一五二）の歌がある。そ

れは、花、鳥、月、雪が、四季の順に並べられているだけの歌である。

春は花 夏ほととぎす 秋は月

冬 雪さえて 冷しかりけり<sup>(9)</sup>

受賞講演を英訳したのは、受賞作品『雪国』を英訳したサイデンスステッカーである。後句の「冬 雪さえて冷しかりけり」を、英訳者は、*Winter the snow, clear, cold* と訳した。筆者の英語の語感に余り当てにならないけれど、どうして「冷し」は、*cool*ではなく、*cold*と訳されたのかと訝しめられる。道元は、「寒かりけり」とは歌っていない。この歌は、道元四十八歳のものである。四十三歳の時、雪降りてまた雪化粧の「邦畿千里を避けて」雪深い越の国の山かげに永平寺を草創して、以後その住房に暮らして既に霜華五廻を経ている道元が、曇降り雪降る厳しい寒さを知らなかったはずはない。にもかかわらず、「雪さえて冷しかりけり」と歌った。

問題は、いうまでもなく、「冬、雪降りて寒かりけり」では小学生の即物的作歌になってしまい、それでは抒情性が失われてしまうというところにあるのではない。唐木順三はむしろ逆の方面からこう言っている。「道元でさへ、三十一文字といふ発想形式においては、その形式に制約されて、〈冬、雪さえて、冷しかりけり〉と附け加へざるを得なかった。漢詩的発想ならば、雪呀、或いは雪冷と書くところだらう。それが和歌においては〈冷しかりけり〉となる。かりけりにおいて作者の心情が顔を出す。即ち抒情風になる。」<sup>10)</sup>傾聴すべき批評であって、確かに、〈かりけり〉において抒情風になる。しかし「冷し」そのものは抒情的であろうか。むしろ「冷し」は、〈かりけり〉における「抒情風」を消し去る。

冷しくありけりの、その〈ある〉の非情を露わにする。「雪降りて寒かりけり」では、単に即物的であるというよりも、文字通り物に即いた執着である。一般には執着は、手に入れようとするもの、手に入れたものへの執着である。しかし雪の寒さも、寒さと実定する限り、それに従した、謂わば負号の付いた執着である。その執着を離却して「雪冷し」なのである。芭蕉の言葉を用うれば、「像、花（風雅Ⅱ筆者註）にあらざる時は夷狄にひとし」（『笈の小文』）なのである。

降り積もれし雪は「呀ゆ。」即ち「さ映ゆ」、雪は現ら映ゆ（現らはる）。雪は映る。雪は映奇し（または映霊）。花の色、ほととぎすの声、月の光と同じく、雪、映奇し。無論、道元個人が見た幻映だということではない。日本の自然の美は、日本国土の苛烈さ、苛酷さが夢と浮かべた映奇しさではないのか。日本の国土が己れ自身を夢見て映じたその夢の映奇しさではないのか。ニーチェの言葉を借りれば、「自然のもつ芸術衝動は、夢の形象世界として、自然の直接的な芸術状態となり、それに比しては、どんな芸術家も〈模倣者〉でしかない」（『悲劇の誕生』第二節）のである。

道元は言う、「草木国土、これ心なり」（『正法眼蔵』仏性。以下『正法眼蔵』からの引用は卷名のみを挙げる）。心とは何か。「心とは、……山河大地なり。……山河大地心は山河大地のみなり」（即心是仏）。それは、山河大地の現るが、現ら映ゆが、即ち山河大地の在ることである。現ら映ゆであるが故に、在る「国土山河の無常なる」。道元は、「これ、仏性なるによりてなり」（仏性）と言う。即ち、草木国土悉皆成仏。従って仏性とは、深が深の声であり、山が山の色であることである。現りて在ること、在りて現ることである。それが、「心は一切法なり、一切法は心なり」ということである。だから道元は続けて言う、「心は

月なるがゆへに、月は月なるべし」(都機)と。月の現ら映ゆるが故に、月は月にして在るのである。月とは月影である。月の、心に存ずるが故に、月は月にして在る。だが、断じて唯心論・観念論ではない。確かに「うらむべし、山水にかくれたる声色あること。又よろこぶべし、山水にあらはるゝ時節因縁あること」と言われる。つまり、(かくれたる)の上に(あらはるる)が浮かび出るかのように見える。しかし、すぐ続けて言われる。「しかあれども、あらはるときをや、ちかしとならふ、かくれたるときをや、ちかしとならはん」(溪声山色)と。つまり、(あらはるとき)を共にしているのである。だから、道元は逆にこう言う、「あらはれざれども、かくれずと参学すべし」(行持・上)と。

今一度、誦しておこう。

春は花 夏ほととぎす 秋は月  
冬 雪さえて 冷しかりけり

春は花 夏ほととぎす 秋は月  
冬 雪さえて 冷しかりけり

形見とて何か残さむ

春は花 山ほととぎす 秋はもみじ葉<sup>(11)</sup>

歌人・吉野秀雄は、良寛の弟・由之の日記にみえる、「よし子(山田杜阜||筆者註)が御形見乞ひし歌の御かへし」という言句を引きながら、「(かたみ)といっても死に際して詠んだというわけではなく」と述べて、

この歌を次のように評している。「歌としていかがかというに、道歌じみていて一向よろしくない。こんなのをよるこんでいては、決して良寛の歌の真のよきには近づきがたいのである。」<sup>(12)</sup>確かに、人はこの歌を道歌として、つまり自分なぞには「近づきがたい」境地、ただ仰ぎ見るものとして、だからこそ「よるこんで」口の端にのぼせた。事実また数多くの本に引用されてきた。そうしてこの歌はいつしか手垢が付いてしまったのかも知れない。しかしその手垢を拭き取れば、見えてくるのではないか。即ち、歌に、死の冬の謂わば詠題だけではなく、春の花、夏の山ほととぎす、秋のもみじ葉が、冬枯れの野に落ちる陽光を受けて浮かび出でていることを。この歌は、そのような意味で辞世の歌ではなからうか。良寛個人の「死に際して詠」まれたかどうかは、問題の外である。

「<sup>(13)</sup>粵に吾が永平有り……幽として輝を蒙らざる靡く、輝を垂れて島夷に及ぶ」と良寛が詩ったその輝ける陽・道元、島夷といえど「大地有情と同時に成道」せし道元、しかし道元のあとに道元なく、「永平古仏の録」・正法眼蔵も「五百年來、塵埃に委せし」ままに、冬の枯れ渡る野に、陽は日色薄く落ちて行った。その詩にまた言う、「大廈(道元)の將に崩倒せんとするとや、一木(良寛)の支ふる所に非ず、清夜、寐ぬることを能はず」(括弧内は筆者)

眠ることの能わぬ夜はどうであったか。「春雨、雪に和」し「春夜、蒼茫たり」で始まる別の詩『読永平録』の最後の段はこうである。

古へを慕ひ今に感じて心曲を勞す

一夜、燈前、涙留らず

湿ひ尽くす永平古仏の録

翌日、隣翁、草庵に來りて

我に問ふ、此の書、何に因つてか湿ふと  
道はんと欲して道へず、意、転勞す

意、転勞すれども、説くも及ばず

頭を低れ、良久しうして一語を得たり

夜来、雨漏りて、書笈を湿すと

明らかに「国土うるほう降す雨」のこの「一語」が、感傷に流れ終ることを堰き止めた。けれども、「形見とて何か残さん」の歌も同じ「涙」で湿っていないか。道歌として読まれたとしても、その抒情性が多くの人をして愛誦せしめたことは確かである。それに対して、この歌の、たとえ文芸・歌論上のそれでないとしても本歌たる「冬、雪冴えて冷しかりけり」の歌は、「本来の面目を詠ず」と詞書が付されている通り、一切の抒情性を絶ち切っていて、抒情の涙で「本来の面目」が曇ることはない——と見えた。だが道元自身が、後になってこの歌を悔いた。既に述べたように、この歌は道元四十八歳のものである。それから五年の後の夏の初め、道元は病に臥し、そのまま同年八月二十八日、示寂した。その病の床で歌った。

花もみぢ冬の白雪見しことも

思へばくやし色にめでけり

「色にめづ」とは、道元自身が別の歌に「闇に迷ひて色にめでけり」と言うように、表面に現われた美麗・情趣に目を奪われて「心月」を失うことである。「冬の白雪」を「冴えて冷しかり」と見しことを道元は悔いた。その「白」は、美麗なる「闇」であった。それは、唐木順三の

言ったように、雪冴、雪冷としたとしても、同じことであつたらう。道元自らの言う「文筆・詩歌等、その詮なきこと」(『正法眼蔵随問記』一ノ十二)であつても、そのことは、この悔恨を和らげはしないであろう。禅語に言う「悟り悟りて未悟に同じ」と思い出してみるまでもない。道元自身が、「証の修なれば、修にはじめなき」ように、「すでに修の証なれば、証にきはなく(辨道話)すなわち、修業は続き証悟に終点はないと言っている。「雪冴えて冷しかりけり」は一つの証であつたればこそ、生涯の終り近くなおそれを悔いる。悔いる道元が、代々の百の道得の人から一つの道元を分かつ。

それでは、「形見」として、雪を残さんとしなかつた良寛に、雪は何であつたか。

おく山の 菅の根しのぎ ふる雪の、ふる雪の ふるとはすれど  
つむとはなしに その雪の その雪の

「その雪の その雪の」で途絶えているのは、良寛自身の命がここで途絶えたからである。文芸的に言えば、力弱まつた良寛の手からここで筆が離れ落ちたのである。兄の死の床のほとりに散らばっていた歌稿を見ただ由之は、「是等はくるしみにたへず、かきおせたまはずと見えし」とその日記に誌している通り、吉野秀雄も、「いよいよ病氣の重篤に陥つた良寛のとぎれとぎれのせつない息づかいを聞く思いがする」と述べている。天保二年(一八三一年)正月六日、良寛は遷化した。

だが、吉野の言うように、この歌の「意味は不明瞭」だろうか。歌の序詞は、『古今和歌集』五五一にある、「奥山の 菅の根しのぎ 降る雪の 消ぬとかいはむ 恋のしげきに」から取られている。だが、良寛の

雪は「消ぬ」のではない。降りまた降る。降りまた降るけれど、積むとはなきこの雪は沫雪である。つまり春の雪である。天保元年の暮れか二年の年の始めに、つまり真冬に降る実の雪に見られた、謂わば虚の雪である。冬、雪降りて寒けりと同時に見られた幻映の春の雪である。無論、良寛自身が病の熱にうなされて夢現に見た幻映だというのはない。

「その雪の、その雪の」と、雪降りしきるなか、雪そのものが、何か手を伸ばしても手に取れず手にふれえぬ雪である。

苛酷、苛烈の日本国土は、自らを詠き自らを侘るほどに「夢の形象世界」となる。いや、夢という語はもう使うまい。自らに反り映して、その反映の映奇しさが、日本自然の美である。それを形見に残しうる故に、「死ぬ時節には死ぬがよく候。」

良寛七十一歳、文政十一年（一八二八年）十一月十二日、平成十六年の中越地震とほぼ震源域を同じくする地震があった。震度はおそらく6強〜7。死者は推定一四〇〇人。広い越後平野で人は疎らに、藁葺きか茅葺きの葛屋に住んでいたことを思えば、恐るべき数といわねばならない。島崎村の木村邸内の裏屋に寓居していた良寛自身は無事であった。ほぼ一ヶ月の後、十二月八日、大きく被災した与板村の友人・山田杜阜に宛てられた手紙——「地しんは信に大変に候。野僧、草庵何事もなく候。親るい中、死人もなく、めで度く候。うちつけに死なば死なずて、ながらへて、かかる憂きめを見るが、はびしき。」

しかし、災難に逢ふ時節には逢ふがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是ハこれ、災難をのがる、妙法にて候。かしこ。良寛<sup>(20)</sup>

書中、「うちつけに死なば死なずてながらへて、かかる憂きめを見るがはびしき」は、そのまま和歌一首となっている。そして歌いおえて、「はびしき」自らに向かって言った。災難に逢う時節は逢うがよく、死

ぬ時節は死ぬがよいと。「しかし」とそう言い始めた時は、自らに語り自らに聞かせる言葉として謂わば主観的であった。しかし言い終えた時は、言葉は客観的となっていた。だから付け加えた。「是ハこれ、災難をのがる、妙法にて候」と。災難に逢い災難に死して災難と共なるが、災難をのがることである。災難と共なれば、災難に逢うこともない。それが、法がそれとして現れぬ「妙法」である。良寛のこの二行を、吉野秀雄のように、「いかにも禅坊主らしい気鋒峻烈な死生超脱の大安心」の語録と読んでいては、それこそ良寛の「真のよきには近づきたい」のではなかるうか。

日本国土の国史上少なくとももう一つある。良寛も、「是の翁以前に是の翁なく、是の翁以後に是の翁なし」と賛した芭蕉翁の『野ざらし紀行』の中である。富士川のとりに行くに、三つばかりの捨て子が哀れげに泣いていた。しかし「露ばかりの命待つ間と捨て置きけむ」。秋の風に、今宵散るか、明日に萎れるか。袂から出した喰物を投げて通り過ぎた。そして芭蕉は歌うが、その歌は、歌い上げながら佞屈としている。大きく歪んだと言ってもよい。

猿を聞く人 捨て子に秋の風 いかにか

猿の哀切な泣き声に己が哀傷を託してうたう伶人たちよ、それでは、捨て子のこの泣き声をいかにか聞くか。そして「いかにかぞや」と捨て子自身に向う。

いかにかぞや汝。父に悪まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。ただこれ天にして、汝が性の

拙<sup>つた</sup>なきを泣け。

だが、芭蕉は捨て子に向かつてこの言葉を投げたのではない。投げたのは、袂からの喰物である。捨て子を捨て置き、過ぎて数歩、振り返らず芭蕉はその背で、「猿を聞く人」と歌い、そして数十歩の後、その背で、「汝の性の拙なきを泣け」と言った。非情なのは芭蕉ではない。非情というなら、「ただこれ天にして」、日本の国土自然の非情である。日本の国土自然の〈ある〉の非情である。哲学用語を用いれば、〈存在〉が〈生滅〉である非情である。芭蕉自身、『奥の細道』で自らに向かつて言っている。「道路にしなん、是天の命なりと。」（飯塚より笠島への条り）

## 第二章

日本国土の苛酷、苛烈とは何をいうのか。東洋でも西洋でも、宇宙自然の根本元素として四つ挙げられていた。古代インドでは〈四大〉といわれ、古代ギリシアにおいては、例えば紀元前五世紀の哲人エムペドクレスによって〈四根〉といわれていた。それは、地、水、火、風である。古代インドの思想も古代ギリシアのそれも、未だ神話を出ない古いものというのなら、〈モナ・リザ〉の後景を見よ。「一切を描くのでなければ偉大なアマエストロではない」と言ったレオナルド・ダ・ヴィンチは、その後景にいかなる宇宙自然を描いたか。画面に向かつて左から時計廻りに——地下深くの火によって赤く熱せられて水が地上に流れ出ている。その水が冷えて青くなり、大河に注ぐ。太陽は見えないが、その熱によって水は空中に水蒸気となって地を青くかすませる。青いのも、また太陽の光による。湖のような豊かな水がある。空中の水蒸気が雨となって

降り注いだものであろう。そこから再び川が流れ出る。その川に石橋が謎のように一つ架かっている。私たち人類の以前にもう一つの人類があったかのように。そして川はモナ・リザの背後で再び地下に落ちていくことであろう。二十世紀初頭のドイツの詩人リルケは、「この画面において、人間の以前にあるもの、人間を超えてあるものすべてが、山岳、樹木、橋、大気、水流のこの神秘にみちたつながらの中に収められている。……この風景は、誕生した自然、生成した世界である。」（『風景について』と述べている。

### 一 日本の「水」（雨、雪）

日本の年間総降雨量は、全土平均で一六〇〇〜一八〇〇mmである。<sup>(23)</sup>それは地球の全地表平均の約二倍である。しかも時期時期に集中して降る。梅雨末期、颱風期、日本海沿いの冬の季節雪。日本の大地は、北海道から九州まで二〜三〇〇m級の山岳が脊梁をなしている。降った雨は、その高さから、直線にすれば僅か一〇〇km前後をかかなりの勾配で流れて海に出る。だから、日本の川は、流れているというよりも、滾り落ちていく懸河である。明治期のお雇い工師の一人、オランダの、つまり大河ライン河下流のほとりて育った土木学者デ・レイケが、富山県の常願寺川を視察して言った。「これは川とはいわない。滝である」と。<sup>(24)</sup>日本国土では、だから、降れば洪水、照れば濁水である。数字でいえば、最大水流／最小水量で表される河況係数は、例えばロンドンを流れるテムズ川が八であるのに対し、利根川のそれは九二八である。この国では洪水になるとは、一すじの撚り糸が突然荒縄になるようなものである。黒田孝高（如水）が水の五則の第一に、「常におのれの進路を求めて止まざ

るは水なり」と言うごとく、水流の恐さは水量よりもむしろ流勢にある。小心者の筆者に真似のできないことであるが、洪水時の川の堤防の上に立てば、堤防が震え、軋む音さえするという。日本国土ではその急流のために、水系は孤立する。一級水系だけに限っても一〇九の水系があり、従って、大摺みにいって日本国土は一〇八の分水嶺によって櫛の歯のように分断されている。これに比べて、例えば、見れば一枚の畳のような国土のフランスでは僅か六水系で全土が潤っている。日本国土の水はその急流の故に溜めておくことができない。日本にはダムその他の貯水施設は三〇〇箇所があるが、その総貯水量は僅か三〇〇億トン。僅かというのは、これは長江の三峡ダム一つ分の貯水量と同程度であるからである。

世界には、東何某、西何某とか北何某、南何某という地名は多く見られる。しかし表日本、裏日本というように表裏で分けられる例は、寡聞にして他には知らない。それは雪の降らない日本と、雪が降り一年のうち数ヶ月もの間雪に閉ざされる日本である。面積から言っても、積雪寒冷地帯は日本の国土総面積の六〇%であるから、表裏はほぼ相半ばする。半分を占めるその地帯の年間平均降雪量は、累計四mを超す。特に北陸道は世界有数の豪雪地帯の一つといわれる。しかし他のどこをこれに数えることができるのか。標高数千メートルのヒマラヤ山腹か、北緯七十度のグリーンランドの氷雪原か。なるほどブリザードも暴威的ではあるう。飛雪、千里にも散らう。むしろ神々の戯れのように痛快でさえある。しかし、これまた良寛の臨終近き頃の歌反故にあった詩句、

風まじり 雪は降りきぬ  
雪まじり 雨は降りきぬ

に見るような凄絶な雪は、他に世界のどこに降らう。しかもその降りこめる雪の地に幾百万の生民がいるのである。このついでに言えば、——良寛の生地である出雲崎で句想を得て芭蕉が詠んだ句、恐らくは日本国土をうたってこれほど壮重な調べの句は二つとはないと思われる句、

荒海や 佐渡によこたふ天の河

は、文月に詠まれている。いくら北の海の滄波とはいえども、この季節には荒波は立たず荒海とはならない。芭蕉自身も、「まだ初秋の薄霧<sup>(26)</sup>もあへず、波も高からざれば」と述べている。まして出雲崎は、この海岸では、寄せる波の最もおだやかなところで、古来、舟泊の水門として栄えていた。それで荒海の時ならば、佐渡は吹雪に閉ざされて、天の河も見えぬ。だが芭蕉は、天の河が渡る夏の日本海に、冬の荒波を見たであろう。映奇しく。良寛が、冬の雪に春の雪を見たように。「海の面<sup>(27)</sup>ほの暗く、山の形、雲透<sup>くもすき</sup>に見え」たその雲は、佐渡金峰山の帯する雪と映り、見紛われたであろう。

## 二 日本の「風」(大気)

太平洋航空路のパイロットたちは言う。ロス・アンゼルスを発って、太平洋空域は、その気象が平べったりとしたおだやかさで、鼻歌まじりに航行できるが、成田が近づき日本空域に入ると、コックピットにさつと緊張が走る、俄かに気流が乱れ始めると。あるいはまた、風を受け波を切るヨット、太平洋横断のヨット・マンたちは言う。サン・フランシ



スコを出て、東京湾を目指す、しかし文字通り、九十九里をもって半ばとしなければならぬ、最後の一里、日本近海に入ると、波の飛沫は顔面を打ち、マストはきしむと。あるいはまた、アリュウシヤン近辺やベーリング海に出漁する漁船が遭難するのは、これらの北の水域ではなく、ほとんどが日本近海においてである。事実、一年を通じれば、日本の近海域を日に平均一つ以上の低気圧が通り過ぎる。通り過ぎて海はしける。

そして二十十日の頃、人の首をも吹き飛ばす南海からの暴風が襲う。颱風は、大西洋東部のハリケーン、インド洋のサイクロンと共に世界の三大暴風雨とされているが、その襲来の数が違う。近年、上陸颱風の数が最も多かった平成十六年とは、この年に発生した颱風の数は二十九で、そのうち十を数える颱風が日本国土に襲来したということである。

日本の空では大気は渦流する。『莊子』の「斉物論篇」は、「女は人籟なんじを聞くも未だ地籟を聞かず、女は地籟を聞くとも未だ天籟を聞かざる夫」で始まる。人籟とは、人の吹く笛の音である。地籟とは、大地の嘖気、名づけて「風」が、地の穴に出入りして鳴る音である。しかし天籟とは何か、天の笛の音とは。「夫れ万の不同を吹きて、其れを己れよりせしむ。」註釈者も意味を読みあぐねている。万ずの音の、己れよりせしむ根源である「無」のようなものか。風は地籟をして己れよりせしむが、風そのものには音はない。勿論、目にも見えない。しかし風と風が、無と無が天の一角でぶつかる、その音が天籟であろうか。司馬遼太郎は、それを「聞いて何ほどのこともなく、聞かずともまた一生」と言っている。一生に一度、聞けるかどうか。だが日本では、生涯に幾度も聞くのではない。地上ではむしる風もなく地籟もなく、晴れ渡った空に。

### 三 日本の「水」と「風」と「火」

日本国土は、単に地図を広げてみて、そのぐるりが海に囲まれているというだけではない。日本列島は、蕪村の言葉を借りれば、まさに「波もてゆへる秋津しま」なのである。

しかし日本の沿海は、波の打ち寄すだけではない。海そのものが流れをもつ。大西洋のメキシコ湾流とともに日本海流は世界二大海流の一つである。湾流は、ただひたすらに大西洋を北東に向かい、偏西風と共にヨーロッパ大陸に暖かい風を送るだけであるが、北上する黒潮は日本列島を挟んで二手に分かれ、太平洋側では、南下する寒流、つまり親潮と呼ばれる千島海流とぶつかり、他方、日本海側では、日本海流の支流である対島海流は、寒流のリマン海流とぶつかる。世界海洋地図を広げてみると、世界に三十余りある海流のうち、寒流と暖流がぶつかり合っているのは、北大西洋のグリーンランド近海と日本近海のみである。なるほど、ドーヴァー海峡四十km余りは泳いで渡れても、対島海峡を——たとえ壱岐、対島と伝っても——、あるいは十八里向うの佐渡島へは、どんな猛者でも泳いで渡ることにはできないのである。

先にあげた黒田孝高の水五則では、さらにこう述べられている。「みづから活動して他を動かすは水なり。洋々として大海を充たし、発しては霧となり、雨雪と交じ霞と化す。」大気を動かすのは、つまり「風」を起こすのは、陽（火）の熱そのものと、その熱によって海上に発する霧（水）である。それらにより、あるいは乾きあるいは湿りして軽い大気と重い大気が生じ、流動するからである。その風は、水以上に、というより把えどころもなく活動してやまぬが、動かさる、あるいは鈍

重なる地の——砂漠に見るように——乾いた表面の土を動かすのみである。しかし水は、水流となって地を削る。

既に見た「モナ・リザ」の後景をなす風景は、下村寅太郎の語るところによれば、こうである。「峻峻な岩山は、大地と水流の相剋の結果として露出した大地の骨であり、生成した自然の姿である。」<sup>29</sup>「生成した自然」とは、先にリルケの言葉としても見た通りである。さらに下村は続ける。「生成した、生成しつつある自然が、幽遠な古山とその裾をめぐる蒼然たる山湖や河川となる。この風景は更にその終末を暗示する。」<sup>29</sup>その暗示は、レオナルドの最晩年の大洪水の連作素描によって明示となる。それらの連作は、——これも下村に依れば——大地と水流の相剋という宇宙自然の原理に従い、最後には大洪水によって、人間のいる世界が没落するという終末論、その絵画的表現である。<sup>30</sup>その暗示は、既に「モナ・リザ」の背景にある一本の石橋に、かつて人類があったということが示されることでも、なされていた。

日本国土は、変化の多い海に晒され、時に咬まれ、変化の多い、時に激変する風に巻き込まれ、変化の多い、時に土砂のように降る雨にずぶ濡れとなり、再び言うまでもなく、その雨が洪水激流となってこの山岳列島を削り削って駆け落ちる。日本国土は、最も〈終末〉に近い。

しかし、日本列島の全面積の七〇%を占める山岳地帯では、高山を除けば、「露出した大地の骨」ではなく、ほとんどは柔らかく森林に覆われているのではないか。現在は、かつて方々に散在していた禿山や裸地がほとんどないという、日本史上初めての状態になっているとすら言われる（幾億年間地中深く眠りしを掘り出し、汲み上げ、これを燃料として火力を得て以来、もはや森林を伐採して薪炭を得る必要がなくなったからである）。だが、斜面を覆う森林の暗緑は、「荒海」の暗緑の移り

「映った」ものではないのか。「海やまのあひだ」（釋迢空）といわれるこの国土においては。

その暗緑の上に抜きん出て、高山は玲瓏たる霊峰である。だが、大地と水流の相剋を描く「モナ・リザ」の背景には、地熱で暗赤色となった今にもむくり上らんばかりの山塊もあることを忘れまい。

日本という弧状列島は、世界最大の火山帯である環太平洋火山帯の上にある。北のアラスカから続いて、火山帯は丁度日本列島で分枝し、東南の方へ続いてマリアナ諸島へ向かうのが東日本火山帯であり、西南の方へ続いてフィリピン諸島へ向かうのが西南日本火山帯である。そうであるから、世界にある約八百の活火山のうち、その八十五がこの日本にある。富士も、つい三百年前の宝永年間にも火を噴き上げた活火山である。天か地か、今も鳴動はやまない。日本の火は、太陽から汎ねく光と熱が降ってくるだけではない。地の底からも噴き出す。

環太平洋火山帯のように大洋の周囲をめぐる火山帯は地殻変動も激しく、それは地震帯とほぼ重なる。それ故に、世界の有感地震の実に二〇%がこの日本列島で起こる。しかし、このような火山性地震はそれほど大きく地を揺るがすことはない。

#### 四 日本の「地」

固体地球は、数十から百kmの地殻及び上部マントルより成る十数枚のプレートでその全周面が覆われている。その十数枚のうち四枚——北アメリカ、ユーラシア、太平洋、フィリピン海、のプレートが、日本国土及びその周辺で犇きせめぎ合っている。例えば、富士山麓の静岡県小山町の神縄断層には、伊豆半島を運んできたフィリピン海プレートによっ

て、本州を載せているユーラシア・プレート及び北アメリカプレートが押し上げられている様が露頭している。筆者はその写真を見ただけであるが、素人眼にも地の層の歪み（ひずみ）がはっきりと見てとれる。

そのプレートが沈み込むところが海溝であって、海の底が急斜面となっていて一万mも傾斜している。世界の海洋には十五の海溝が数えられている、そのほとんどは環太平洋にある。そして日本国土は、四つ——北より順に、千島・カムチャツカ、日本、伊豆・小笠原、琉球——の海溝が「人」の字の形をなして並んでいるその間に列島をなしている。日本列島そのものが、巨大な絶壁群に臨んでいると言わなければならない。

列島の間近で、海溝型の巨大地震が引き起こされる。だから、規模でいっても、世界のマグニチュード6以上の地震の二〇%が、この国土を襲っている。しかも列島の地質たるや、火山が噴き出して冷えた火成岩類と堆積岩類が複雑なモザイク模様をなして極めて不均質、不安定である。その上、複雑な雨や風のため、風化は一樣ではなく、岩盤を一層脆くする。地震で、洪水で、いつでも崩れる。日本国土では、道元の言うように、そこに人の立つところの大地すら（無常）なのである。この国土の草莽は、関西言葉の語調で、「もう、もみくちゃですわ」と笑い泣きするしかないのである。

### 第三章

「国土山河の無常なる」——『方丈記』の録したるところでは、安元三年（一一七七年）卯月二十八日、「風烈しく吹きて静かならざりし夜」の大火は、「空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に風に堪へず、吹き切られたる焰、飛ぶがごとく」

治承四年（一一八〇年）卯月のころ、「檜皮、葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に乱るるがごとし」の辻風は、「塵を煙のごとく吹き立てたれば、すべて目も見えず。おびただしく鳴りとよむほどに、もの言ふ声も聞こへず。」

養和のころ（一一八一—二）「二年があひだ、……或は春夏ひでり、或は秋、大風洪水などよからぬ事どもうちつづきて、五穀ことごとくならず」の飢渴で、「よろしき姿したる者、ひたすらに家ごとくに乞ひ歩く。かくわびしれたるものども、歩くかと思れば、すなはち倒れ伏しぬ。」  
「四大種のなかに、火水風は常に害をなせど、大地にいたりては異なる姿をなさず、」だから、昔あった地震もいつしか忘れられていたのだが、同じ養和のころ、「おびただしく大地震ふるること侍りき。……山は崩れて河を埋み、海は傾き陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、巖割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ち処を惑はず。」

一般に、地水火風は——

水は流れ

火（陽）は降り

風は渡り

地は底る

例えば、同じく大洋と大陸に挟まれた島国としてイギリスと日本が比較される。しかし大ブリテン島は、樺太とほぼ同じ緯度に位置していて確かに陽光は斜めに射し、温熱は乏しいが、大西洋からの暖流に乗った温かな偏西風を受けて、ロンドンの一月の平均気温は、東京のそれとほとん

ど変らず約四度であり、他方、東京の八月の平均気温が二十八度の蒸し暑さであるのに対しロンドンのそれは十七度という和やかさである。利根川に較べてテムズ川の流れの緩やかさについては既に述べた。それで、ロンドンの年間雨量は東京のその半分にもかかわらず、水資源量乃至は保有水量でいえば、東京の一人当り三〇m<sup>3</sup>に対しロンドンではそれを上まわる三五m<sup>3</sup>である。イギリスにも、山脈とか高地といわれるものは四つ五つあるが、最高峰——というのも恥ずかしいそれは、アイルランドにある一三〇九mの山である。東京西郊の高尾山よりは高いという程度である。日本では、数年単位の計測でも、大きいところでは一〇cm以上の地殻変動を様々な方向に起こし、図に見るとまるでツイスト状態であるが、イギリスでは数年単位では計測不可能である。0であるからである。大ブリテン島というより能天気島と言いたいくらいである。無論この連合王国を腐すつもりは全然ないが。

秋津島の地水火風は——

水は奔り（海からも）

火は滾り零れ

風は巻き

地は震るう

我が国土は慟哭・嗚咽の国土である。あたかも地球自身の慟哭であるが如くに。

「荒海や」の一句について、山本健吉は書いている。

表現としては単純極まる風景詩であり、……ここには、〈佐渡は四

十九里、波の上〉とうたった民謡と同じ庶民的な声さえ聴こえてくる。だがそれは同時にまた、高い詩人的使命を自覚したものの慟哭の詩でもあった。……特定されない相手に何か激しく訴えようとする第二の声が響いてくる。<sup>(31)</sup>

「表現としては単純極まる」のは、現われ現れる国土と、表わし表する詩人とが、一つと重なった表即現の〈表現〉であるからである。それ故、訴える相手の誰であるかは、特定されようもない。そもそも相手はおらず訴えてもいない。この国土に住まう自然住民の、この国土に謡うその歌声は、何を訴えよう。その歌声そのものが、この国土自然の映りたる映奇しさであり、それを共にして、表せん詩人の、つまり国史の慟哭は現ぜんこの国土自身の慟哭である。<sup>(32)</sup>「庶民的な声」と「第二の声」は耳の中でいつでも入れ替る。

慟哭し嗚咽する我が国土は映奇しい。しかしこの国土に住みながら、私たちは「うつくしい」という言葉——和語の基本語中の基本語であるにもかかわらず——を、振り返ってみても、めったに遣うことはない。この語には、言ってみれば、言霊がこもりすぎていて、私たちは畏れをなしているのであろうか。代りに漢語から借りた「綺麗」を遣う。私たちは、「桜の花が今が盛りできれいだ」と言う。「クリスマススの近づくイリミネーションがきれいだ」と言う。「夕焼けが真ッ赤できれいだ」と言う。

国語学者によれば（例えば三浦つとむ『語源海』）、〈うつくし〉は〈いつくし〉が音韻変化して生まれた言葉であり、その〈いつくし〉の語義は、靈妙で威厳があることだという。それ故に、「大和の国は皇神の厳しき国」（紀・歌謡）に見られるように、〈厳し〉とか〈靈し〉と書

かれるのだと。しかしそのような〈いつくし〉から、どうして〈いつくしむ〉(愛くしむ、慈しむ)という語が——中世末期からだそうだが——出て来たのだろうか。むしろ逆ではなからうか。つまり〈いつくし〉の語が音韻変化して、〈いつくしむ〉の語が生まれたのではないか。果たして、上代では〈いつくし〉は、「いつくしき吾が若き子」などと言われるように、〈愛し、愍然し〉という意味で遣われていた。『竹取物語』の、「それを見れば、三寸ばかりなる人、いといつくしうてゐたり」などでも、小さきものへのいとしみ・愍然さが語られているのだろう。しかしこれに先立つ文、「もと光る竹なむ一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに筒の中、光りたる。それを見れば——」と合わせて一息に読めば、「いつくしう」には、〈盡しさ〉或いは〈奇しさ〉が謂わば底の光りのようにちらめいているのを見ることができるとは、〈映る〉ことそれ自身がくすしきことであるからではなからうか。『源氏物語』若葉・上にも、「うるはしだちて、いつくしくあざやかに、目も及ばぬこちするを」と、時には、直見ることが憚れるほどにもくすしい。映ることはまた「うるはしだちて」映えることでもある。

それで私たちは、「夕映えがうつくしい」と言う。「散り行く桜がうつくしい」と言う。今宵遠く離れねばならない恋人たちは言うであろう。「寒空にイルミネーションがうつくしい」と。終りを見る眼は川端康成の語を用いれば、「末期の眼」となるのであろう。末期の眼に、うつくしいのである。この国土もまた、これを、きれいだとは言わない。うつくしいのである。末期の眼に映じているのである。この国土にあって、この国土がうつくしいのなら、「美しい日本の私」であるのなら——「草木国土悉皆成仏の御法を得てこそ失せ」なん——いつでも死ぬ覚悟ができていなければならぬのである。地震、颱風、雷雨、土石流、溶

岩流、いずれにもいずれにも、「うちつけに」逢うのである。

平成二十四年十月、四十八年ぶりに東京で開催された国際通貨基金・世界銀行年次総会でのこと、イギリスのBBCが国際同時中継していたあるセミナーのさなか、地震が起き、会場は凍りついた。凍りついたまま会場は揺れ続けた。だがイギリス人司会者がとっさの機転で、「日本人が逃げ出さないから、大丈夫です」と言って、笑い声と共に会場の空気が緩んだ。日本人は、もう慣れっこになっているのではない。〈無常〉を心得た、死の覚悟のふるつわものなのである。<sup>33)</sup>

平成二十三年三月十一日のあと、東北沿岸の一人の農婦が言った。「今度のこと自然のことであるから、誰も恨まなくて済む。それがせめてもの救いです。」この国土に住まう者は、誰も恨まずに死ぬる死の覚悟ができていたのである。

平成七年一月十七日、家を失い家族を失って逃げまどった一日、夜は、臨時避難所にあてられた小学校体育館の壁板に背をもたらせ、毛布一枚に身を包ませて目を瞑った。しかし寒さと空腹で眠れるものではない。夜も明けやらず、グラウンドに出た。東の空に、大阪湾の向こうの紀伊の山の端に太陽が昇った。それを見てその男は言った。「朝日がこんなにもうつくしく昇るとは、これまでの人生、知らなかった」と。夜の明け初める朝日のうつくしさは、何を指さすだろう。「死ぬ時節には死ぬがよき」死の覚悟にのみ、単なる世間道徳、市民道徳ではない倫理が生まれる。

現時の日本は、日本海の向うの、ロシア連邦には足指を踏みつけられ、たまたま、中華人民共和国から蹴り上げられ、大韓民国からは小突かれ、朝鮮民主主義共和国からは唾を吐きかけられ、それでも手も出さずにじっと堪えている。じっと堪えているのは、太平洋の向うのアメリカ合衆

国が支えてくれているからである。アメリカ合衆国は、後ろから羽交い締めにして日本を支えている。つまりは、米中二大国——この欲望二大国に挟まれて、今の日本は、己が固有領土をもつ一国家としては見るも無残な惨憺たる〈平和国家〉である。(とは言え、謂わば自然領土の島嶼国家として、もともと幸せすぎたのかもしれない。)

しかし神戸のあの男の、無一物となり、ひもじさと寒さの中で澄み渡った目、その明眸に、それまでの人生で知らずで、映奇しい朝日が昇ったように、この国土に生まれそして沈んだ倫理がもう一度立ち昇った時、その倫理こそ今日の地球人類を<sup>すく</sup>済うだろうと、東北被災民の譲り合う姿を見ても、筆者は深く深く確信している。

つねにどこかに火のほひするこの星に

水打つごときにこほろぎの里

(斎藤史『風翻翻』)

歌人の鼻孔におったのは、戦火だったかもしれない。だがその火は——、赤くなく青白くすらない火を吐く、この星に何百基とある原子力発電所、何千基とある火力発電所、空中に何千機と飛び回るジェット機、地上に何億台と動き回るガソリン車、その劫火ではなかったらうか。この日本国土で、本州の北端から九州の南端まで時速三〇〇kmでつっ走る新幹線、林立する何十階建てのビルディング、地上最高の塔、六〇〇mを超して天を摩せんとする何とかツリー、どれもこれも気違い沙汰かもしれぬ。それでも、この日本国土に住む者の心の深く深くに、水打つごと

きに「<sup>すず</sup>冷しかる」「こほろぎの里」があると筆者は信ずる。あの倫理が再び立ち昇ることを信ずる。

註

(1) 鳩山由紀夫氏は、首相在任中、日本在住外国人に地方参政権を与えるか否かの問題に関して、賛成の立場で「日本列島は日本人だけのものではない」と発言した。もし「日本列島」のものと(日本領土)が意味されているのなら、それは、定義上、日本国籍を有する者だけの領土である。日本人であるかどうかは問われるところではない。しかし、(日本国土)が意味されているのなら、それは日本人だけのものではないばかりか、そもそも人間だけのものではなく、禽獣草木の棲むところである。多分鳩山氏は、(友愛)とかという己れの政治原理につられて、ふらふらと後者のことを考えていたのであるが、このルービーさんの頭では、そもそも(領土)と(国土)の区別はつかないだろうと思われる。

(2) 堀場清子編『青鞥』女性解放論集』岩波文庫 平成三年 二四頁

(3) 北條勝貴の論考「草木成仏論と他者表象の力—自然環境と日本古代仏教をめぐる一断面」(長町裕司他編『人間の尊厳を問い直す』上智大学出版 平成二十三年 第二章)によれば、「中陰経に云く」と引用されたのは二つの可能性があるという。一つは、草木国土の亡霊の救済を中陰信仰と結び付けた日本撰述の疑偽経としてのそれであること、他の一つは、竺仏念の漢訳本には、確かに引用に対応する経文があることから、異本の中陰経があったと推測され、それが奈良朝に伝来していたこと、である。

(4) 右の論考において、六朝末から唐初の学僧・吉蔵が、正報(主体)と依報(環境)の相即不二の立場から草木成仏論の可能性を説いた嚆矢であったと述べられ、その『大乘玄論』巻三より次の言葉があげられている。「依正不二を以ての故に、衆生に仏性有らば則ち草木に仏性有り。……若し衆生成仏する時は、一切の草木も亦成仏を得るなり。しかし、(草木)までもでどまり、たとえ(国土)とは言えずとも、(山川)もまた有仏性であるとは語られていない。その理由は、依報といっても生かすそれによって、生かした殺す依報に至っていないということではなからうか。しかしインド仏典である『修行本起経』には、仏陀の悟りの時の言葉として、「明星出現のとき我と大地有情と同時に成道す」(傍点は筆者)と記されているという。

(5) 竹村牧男「(草木国土悉皆成仏)の意義について」『地球システム・倫理学会会報』第2号 平成二年

- (6) 唐木順三『日本人の心の歴史』(上・下) 筑摩書房 昭和四十五年
- (7) 例えば昭和四十七年六月臨時増刊の『新潮』(川端康成読本)の巻頭グラビアにその書の写真を見ることが出来る。
- (8) 川端康成(サイデンステクカー英訳付)『美しい日本の私—その序説』講談社現代新書 昭和四十四年
- (9) 以下、道元の和歌は、松本章男『道元の和歌』(中公新書 平成十七年)より引用。
- (10) 『唐木順三全集』第十三巻 筑摩書房 昭和五十七年 三九二頁
- (11) 『定本良寛全集』第二巻 中央公論新社 平成十八年 五三五頁
- (12) 吉野秀雄『良寛』アート・ディズ 平成十三年 一五〇頁
- (13) 『定本良寛全集』第一巻 三二二頁 なお(粵)は、漢語通りにエツとも読むならば、ここでは(越)が意味されているかもしれない。
- (14) 同巻 四四〇頁
- (15) 「悟り悟りて」は、向上道において悟り、その已悟より向下道においても一度悟って再び未悟に戻るという意味においても解せられるが、ここでは、強意の繰り返しととり、「未悟」は文字通り、未だなお悟らずと訓みたい。
- (16) 『定本良寛全集』第二巻 五一六頁
- (17) 同巻 同頁に見る註釈より引用
- (18) 『良寛』四二頁
- (19) 同頁
- (20) 『定本良寛全集』第三巻 三一五頁 なお、良寛は書簡においてはいつも自らを「野僧」と称んでいた。
- (21) 同全集 第一巻 五五四頁
- (22) 『リルケ全集』第五巻 彌生書房 昭和四十八年 二五八頁
- (23) 以下の地理学上、気象学上の統計数字の多くは、大石久和『国土と日本人』(中公新書 平成二十四年)に依る。
- (24) 但し、上林好之『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』(草思社 平成十一年)二七—二七九頁にみる考証によれば、この言葉は、デ・レイケ自身が発したものでなく、随行した富山県庁の職員が、デ・レイケの説明を文脈的に違えて、拙なく情緒的に受け取り、その言葉が流布したのだという。
- (25) なお一本には、「雨は降りきぬ」は「風は吹ききぬ」となっているという。吉野秀雄『良寛』二九五頁を参照。さらに『定本良寛全集』第二巻二二四頁では、「風まぜに雪は降り来ぬ 雪まぜに風は吹ききぬ」が採られている。いずれにしても、吉野によれば、『万葉集』長歌(五—八九二)の、「風まじり 雨ふる夜の 雨まじり 雪ふ

- る夜は」の影響のもとにあるという。
- (26) 『芭蕉大成』三省堂 平成十一年 四〇九頁の「銀河の序」
- (27) 同書 同頁
- (28) 森三樹三郎訳『莊子』I 中公クラシックス 平成十三年 二五—六頁を参照
- (29) 下村寅太郎『モナ・リザ論考』岩波書店 昭和四十九年 二二九及び三〇〇頁
- (30) 同書 二二三頁
- (31) 山本健吉『芭蕉』新潮社 昭和三十二年 二九三頁
- (32) 保田與重郎の芭蕉論においては、慟哭は、国土のそれであるよりも国史のそれとして、例えば次のように語られている。芭蕉は、「故人の跡を訪れ、その心を恋ひつゝ、国史を回想追憶し、こゝを訪れた代々の先人の心と同じ心境で感傷し、つひには慟哭する。」(『芭蕉』講談社学術文庫 昭和六三年 一六二頁)あるいは、「芭蕉の枯淡も、慟哭も、悲痛も、かうした深い生命と愛情の思ひに立脚したものである。……生物学的な生命や、観念論的な生命ではない。日本の伝統文学の肝心は、さういふ生命観のさらに上にある深いものに立脚し、その道を国史として知った時の、慟哭にあるのである。」(二七—三三頁)と。そして『荒海や』の句についても「芭蕉は『奥のほそ道』では一行の序をも加へなかつたが、はるかに遠い昔からの史蹟を思ひ、万感の追憶にふけつたことは、この一句の莊重さを見て、直ちに感受し得るところである。」(同書一六四頁)と述べられている。つまり、国史の慟哭も、国土のそれと帰を一にしている。
- (33) これについて説得力ある言説を一つ挙げるとすれば——「冬のモンスーンは火事をおおひ、春の不連続線は山火事をたきつけ、夏の山水美はまさしく雷雨の醸成に適し、秋の野分は稲の花時、刈り入れ時をねらうて来るようである。日本人を日本人にしたのは実は学校でも文部省でもなくて、神代から今日まで根気よく続けられて来たこの災難教育であったかもしれない。」(寺田寅彦『天災と国防』講談社学術文庫 平成二十三年)
- (34) 報道各社を初め、ほとんどの人が「3・11(サンテンイチイチ)」と言う。まるで番号札か何かのように。まるで「おと年の柱の瑕」の日付か何かのように。どうして「三月十一日」と早くも言わなくなったのか。それを思うと、筆者のこの確信も白く消え行きそうになる。
- (付記一) 本稿は、平成二十四年度明星大学連続公開講座『災害と日本人』の第二回(十一月十七日)の「日本の国土自然を思う」の原稿を加筆訂正したものである。
- 平成二十四年十二月八日

〈付記二〉 東日本大震災の直後、筆者は仙台在住の、生死もわからぬ友人野家啓一氏に御見舞いの端書きを出した。それには、本文でも引用した良寛の言句を、言葉のおかしな遣い方だが、伸るか反るかかと思いで添えた。それに対し氏は、本年（平成二十五年）一月刊行の書、木村敏／野家啓一監修『自己』と「他者」―臨床哲学の諸相』（河合文化教育研究所）のあとがきで次のように述べている。

東日本大震災とそれに伴う福島原発事故という誰も予想だにできなかった大きな出来事が生じた。「文明災」や「無常」などさまざまな言葉が飛び交い、『方丈記』や寺田寅彦の警世の文章が読み返されたが、被災者の一人でもある私の心に最も響いたのは、友人山下善明氏が震災直後に書き送ってこられた良寛の次のような言葉である。

「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是ハこれ災難をのがるゝ妙法にて候。かしこ」

これは文政十一年（一八二八年）の冬に起きた三条の大地震に際して、良寛が被災した友人の山田杜卓に宛てた手紙の一節である。さすがにライフラインが途絶し、家具が倒れて食器や書物が散乱して寝る場所もない有り様では、これほど達観するわけにはいかなかったが、この言葉を反芻するうちに、跡片付けをする肩の力が抜けて妙に落ち着いた心持ちになったことを覚えている。